

第5回 沖縄科学技術大学院大学学園の今後の在り方に関する検討会
議事要旨

1. 日時：令和7年12月19日（金）10:00～12:00
2. 場所：中央合同庁舎8号館5階C会議室
3. 出席者
 - (1) 構成員
益一哉座長、塩見美喜子座長代理、栗井浩史構成員、高橋真木子構成員、塚本恵構成員
 - (2) 内閣府
矢作沖縄振興局長、中嶋審議官、原審議官、藤嶋総務課長、森下室長
 - (3) OIST（オブザーバー）
マルキデス学長兼理事長、加藤事務局長兼副理事長、グラノットマイヤー首席副学長（イノベーション及びアウトリーチ担当）兼副理事長、シェンプロボスト兼副理事長、ハ准副学長、御手洗研究担当ディーン
4. 議事要旨

議事1 沖縄の振興及び自立的発展への貢献、産学連携について（資料 1-1, 1-2 資料 2-1, 2-2）

資料 1-1 について事務局から、資料 2-1 及び 2-2 についてグラノットマイヤー首席副学長から説明があり、質疑応答及び意見交換を行った。主な内容は以下のとおり。

○＝構成員 ●＝OIST

- まず評価させていただきたいというものを、個人的に言うとなると、iGEM のコンテストに参加されて、金賞、ゴールドメダルを取られたことは、これは良かったと思っている。学生がこういうのに出て、色々インスパイアされているというのは非常に感じていたので、こういう活動は他にもあるので、ぜひ地道に続けられることを期待したいと思う。
- OIST のカンタムの教育のプログラムについては、量子の分野というのは非常にホットで世界中で色々しているなので、その貢献には感謝するとともに、これからもぜひ貢献させていただきたいと思う。それを支えている OIST の研究力があるということも評価させていただきたい。
- 琉球大学との連携は重要である。インターンシップの受け入れや、スタートアップに関するプラットフォームの構築等を通じた連携が進展しており、事務管理部門間の連携も機能している。さらに、採択された J-PEAKS において、連携大学である琉球大学と機関レベルでより体系的な連携関係の構築に向けた検討を開始した。個々の連携にとどま

らず、OISTの海洋科学研究・教育連携拠点（Sea neXux）や琉球大学の附属病院、瀬底研究施設等の活用を通じた補完的な関係の構築を目指している。また、研究リソースの共用ネットワークの構築も進めている。

- 地域貢献という意味で、沖縄全体から発せられる研究成果とか、そういうものが増えたということは、十分に沖縄への貢献だと思っていて、OISTがあるからこそ琉球大学の研究も進展したというエビデンスが出ると、色々なところにアピールするのにいいのかなと思うので、ぜひ、うまくJ-PEAKSを使って、沖縄全体の科学技術、研究成果の発信が活性化されたというのが出るというのいいのかなと思う。
- OISTは、トップサイエンスを目指しているので、ディープテックのスタートアップを通じたイノベーションへの貢献というのが恐らく王道だと理解し、そのパフォーマンスが出ていることが素晴らしい。そのときに、とても重要なのが、ライセンスやネゴシエーションをするスタッフだと思う。ライセンスや交渉をする専門スタッフのインセンティブや、どういう形で彼らを獲得し、学内でキャリアパスを示すか。そのマネジメントについて伺いたい。
- OISTの行っている沖縄への色々な活動は、あまりにも広範でクオリティーが高く、量も多いことに私は感銘を受け、驚くとともに、これ以上やると研究している時間がなくなるのではないかと逆に心配にもなったりした。
- 今回の内閣府からの説明にあった「科学の島」に沖縄がなるという話や、「沖縄をアジア・太平洋の主導的知的クラスターにするという目的の下に設置された」ということなどを、沖縄県民や日本国民の中で認識している人は少数なのではないかと想像する。これからもっとパーセプションを深めていかななくてはいけないと思う。それは、OISTだけでやるのではなく、多分、ここにいる人たち皆、もしくは、沖縄県外の日本企業や日本の大学も一緒にやった方がいいのではないか。
- 経団友会との連携を深めて、すごく丁寧に関係を築いておられるのは素晴らしいと思うので、経団連とか商工会議所等にも広げていって、関心を持ってくれるところを増やすと、OISTの力がもっと発揮する機会となり、さらに有名になるのではないか。
- OISTと日本の大学との連携について、知っている大学は知っていて、それぞれの報告書等を見ると、OISTと交流をして大学生が訪問に行ったというのを写真に出しているところもあれば、意外に著名な先生等でも、実はOISTのことをあまり知らない方とかもいらっしゃるのでは、現在J-PEAKS等で既にやっているように、さらに関係を深めていただけたら、もっとよくなるのではないか。
- OISTの説明により、多様な国際交流、国際理解教育の確立、あるいは、子供たちが科学に触れ合うような機会の創出を確認したが、どれを見ても非常によく取り組んでいて、先生方の研究時間がなくなってしまうのではないかと、本当に心配になるぐらいである。
- スタートアップが沖縄に拠点を有しているかどうか。もし、拠点を持っていないのであれば、何か課題、問題点とかやりづらい点があるかどうか。

- OIST 発スタートアップ（35 社）の多くが沖縄にとどまっている。その理由は OIST の存在や、沖縄県との関連性の高い活動である。これらのスタートアップが沖縄に定着し、成長することで、県経済に与える直接的な効果が期待される。
- スタートアップが、国内、沖縄県にとどまっていることを非常に嬉しく思う。スタートアップが、初めに、経営成績、資金面とか非常に頑張りどころをどうやって乗り越えていくのかというところに関して、沖縄に残ったから倒産してしまった、潰れてしまったというのではあまりにも悲しいので、イノベーションをそこで生み出せるように、そして、経済振興という観点から、人の雇用等につながり、産業界に波及できるのであれば嬉しい。
- OIST が色々なアウトリーチ活動等をしている中で、沖縄に人が来る、OIST があるから人が来ているということは、もっと強調してもいい。特に、日本で理工系に行く学生が少ない中で、理工系に進んでくれるスーパーサイエンスハイスクールの学生をインスパイアすることは非常に重要だと認識している。彼らが沖縄に来て、沖縄を知るのは、それは長い目で見て沖縄の経済効果につながると常日頃思っている。OIST が最先端の研究をやって、その研究者に会いに人が来ると。学生が来る、滞在する、そういうことも、ある意味、考えようによっては経済効果だと思う。
- 今日の議題である沖縄に貢献するという意味で研究分野がかなり、海洋等を前面に出されているのはやむを得なかったと思うが、研究分野については、俯瞰的に考えていただければありがたい。日本の科学技術振興の中で政府の出す 17 分野というのは、ともすれば、OIST から見ると、応用研究とかばかりだから、OIST の一番やりたい基礎研究とは違うのだと思わずに、どの分野も、基礎的なことがあって、応用、イノベーションが直結しているところを理解した上で、OIST がこういうものにどう貢献できるのかというのを考えていただけると、OIST がベーシックサイエンスの側面から、日本の 17 分野に貢献するということにつながる。OIST は基礎をやるのだということを全面的に出すのだが、日本のイノベーションだとか、応用研究だとかの基盤を支えているという戦略は使えるかなと思う。

議事 2 検討会によるヒアリングの目的・視点等について

資料 3 について事務局より説明の上、了承されるとともに、年度内に実施するヒアリングの日程、対象者等の具体的な内容について座長が事務局と相談の上で決定するものとされた。

以上